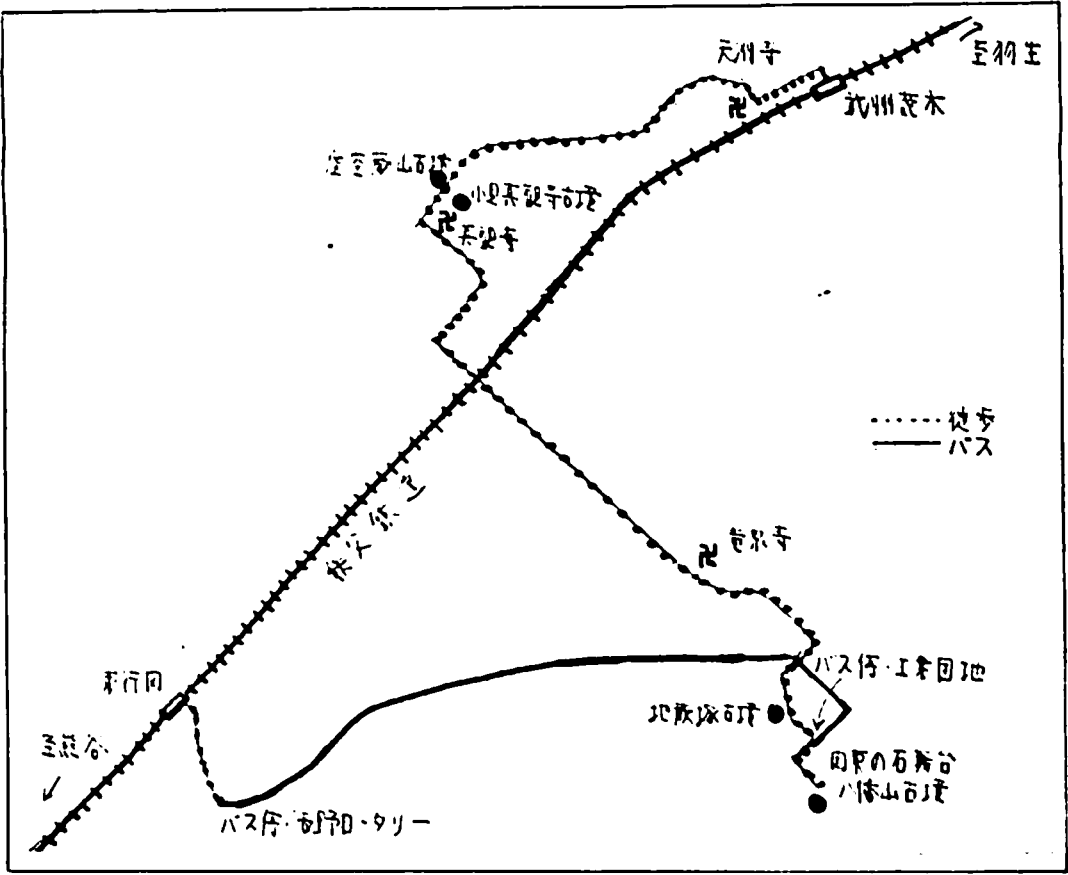


昭和六二年五月二四日（日）郷土研究会資料

第一五三回 史跡めぐり資料

関東の石舞台 八幡山古墳に古代埼玉の謎を追う

越谷市郷土研究会



★第一五三回史跡めぐりご案内

関東の石舞台 八幡山古墳に古代埼玉の謎を追う

とき 昭和六二年五月二四日（日）

集合 東武線越谷駅前 午前八時四〇分集合

午前九時〇一分発（太田行）

コース 越谷駅→羽生駅→（秩父鉄道）→武州荒木駅→

天洲寺（国指定重要文化財の聖徳太子像）→虚

空蔵山古墳→小見真観寺古墳（石室内見学）→

龍泉寺（力士、唐糸六郎の墓）→地蔵塚古墳→

関東の石舞台、八幡山古墳（石室内見学）→埼

玉古墳群遠望→工業団地→（東武バス）→東行

田原→（秩父鉄道）→羽生駅→越谷駅前

会費 二、五〇〇円（含む交通費、交通保険料他）

案内者 宮川 進

將軍山古墳、小見真觀寺古墳と八幡山古墳

みなさまの中で、ほとんどの方は、あの埼玉古墳群を訪ねられたことがおありと思いますが、その中にある將軍山古墳というのを覚えておられるでしょうか。

銘文のある鉄劍の出てきた稲荷山古墳にのぼって、公園全体をみわたすとき、一番左側にあつて、民家のかげに「3枚におろされた魚」のようなかたちで残っている古墳です。

実は、今日、みなさまとおとずれる小見真觀寺古墳はこれと同じ時期（6世紀末〜7世紀前半）に、つくられた古墳なのです。

新潟大学の甘粕健教授は「4世紀後半以降の武蔵には、国全体を治めたとしても、おかしくない大首長にふさわしい古墳が十二基あつた」とされ、それを年代順に次のように紹介されています。

★4世紀後半〜5世紀始め

東京都太田区 宝来山古墳  
神奈川県川崎市 白山古墳

★5世紀前半〜5世紀後半

東京都太田区 龜甲山古墳  
東京都港区 丸山古墳  
埼玉県東松山市 野本將軍塚古墳

★5世紀末〜6世紀前半

埼玉県行田市 丸墓山古墳  
" 稲荷山古墳

★6世紀中葉〜6世紀後半

埼玉県行田市 二子山古墳  
" 鉄砲山古墳

★6世紀末〜7世紀前半

埼玉県行田市 將軍山古墳  
" 小見真觀寺古墳  
" 若王子山古墳

（若王子山古墳とは埼玉古墳群の東南1kmのところにあつた全長九五mの前方後円墳。昭和9年、沼の埋立てで土を奪われ消滅した。横穴式石室は明治時代に発掘され石棺や挂甲、馬具が葬られていたという）

そして、県立博物館の金井塚良一館長は、埼玉古墳群について、次のように述べておられます。

①埼玉古墳群の9基の大型古墳は稲荷山古墳を初現、將軍山古墳を最終末にして、西暦五〇〇年前後から西暦六〇〇年前後まで、約一〇〇年間に築造されたと考えて、ほぼ間違いなさそうである。

埼玉古墳群

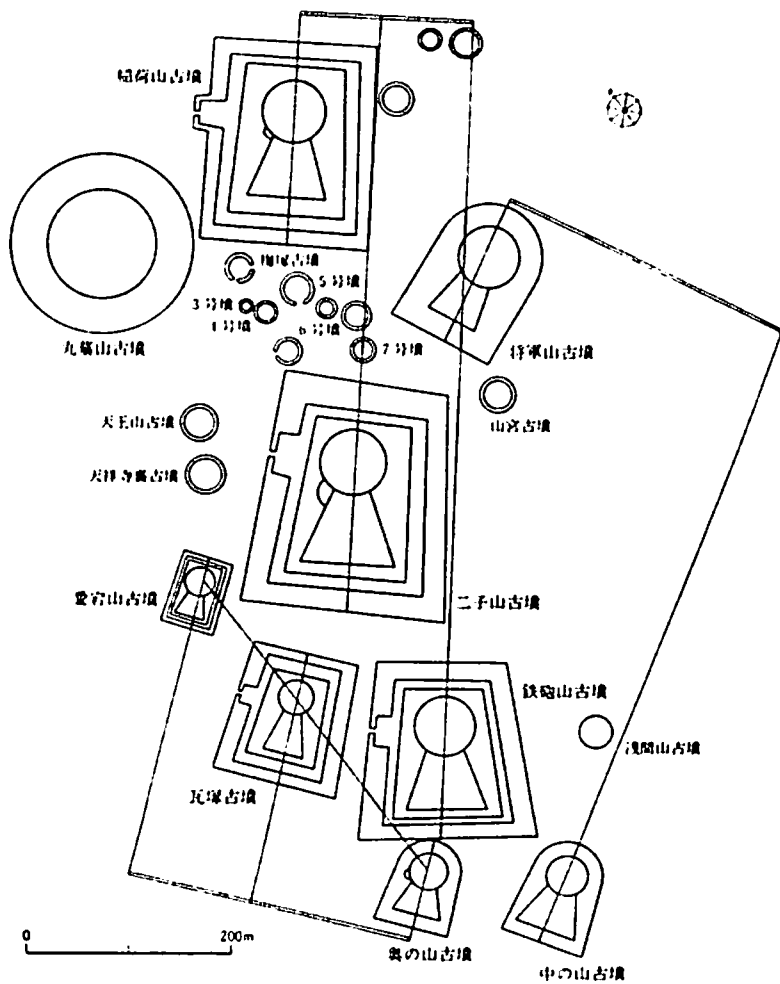


図17 埼玉古墳群の様式図

②九基の大型古墳は出土した埴輪によって出現順序がほぼ確認され、稲荷山古墳―丸墓山古墳―二子山古墳―鉄砲山古墳と推移し、他の小規模な前方後円墳は愛宕山古墳―瓦塚古墳―奥の山古墳―中の山古墳と変遷して、9基の大型古墳が稲荷山古墳から將軍山古墳まで、互いに「継続あるいは平行して築造されてきた」という出現の具体的順序も推測されていたのである。

③この推定によれば、埼玉古墳群の9基の大型古墳は稲荷山古墳から將軍山古墳まで同一系譜に連らなる首長層の墳墓と考えていいだろう。

④鉄剣の銘文が語る「乎獲居臣」（オワケノオミ）の卓越した家格と「乎獲居臣」自身の偉大な功業を回想すると「乎獲居臣」が「北武蔵の豪族」の可能性は、かなり低いようであった。

⑤將軍山古墳と小見真観寺古墳は墳丘規模が、それほど異ならなかった。出土した遺物も、ほとんど大差がなく豪華だったのである。墳丘の外部施設は、いずれも未確認であるが、この二つの古墳を6世紀後半に、北武蔵で傑出した二大勢力の奥津城と考えていいだろう。それにしても真観寺古墳は埼玉古墳群の北方約4km離れた行田市小見地内に築造されてい

る。

しかも真観寺古墳の周辺には虚空蔵山古墳、菟山古墳等いくつかの古墳がつけられて埼玉古墳群とは異った古墳群を形成していた。真観寺古墳は明らかに6世紀後半に、小見地内の微高地上に將軍山古墳の被葬者に匹敵する巨大な権力が成長していたことを示唆していたのである。

⑥（將軍山古墳出土の）銅鏡と蛇行状鉄器がこのような検討によって明らかにされたように「仏教文化とのかかわりが推定される遺品」だったとすれば、これを自らの遺骸に副葬した將軍山古墳の被葬者は、すでに仏教を理解していたことになる。あるいは仏教に感化して、それを象徴する仏具を身邊に置いた「仏教徒」の可能性も推測されよう。

⑦5世紀後半には利根川流域の前方後円墳の形成に大きな変化が認められた。就中、太田市周辺では太田天神山古墳以後、前方後円墳の造営が急速に衰退して、前方後円墳被葬者層の凋落の傾向を顕著に示していた。

しかし、この時期に井野川流域（上野）と思川流域（下野）には、新たな前方後円墳の造営が開始されていたのである。

筆者は、このような利根川流域の前方後円墳の変化

を太田周辺を本貫にした毛野政権の衰退と所謂「毛野国の分国」を具体的に、表現する現象として把握している。

そして、この転換の背景に、稻荷山古墳の鉄劍銘文や倭王武の上表文によって推測された大和政権の東国介入を想定しているが、この動乱とかわわって、

北武蔵に大和政権の軍事的雄族が進出した可能性は充分考えられよう。

5世紀後半に「上野国の有力な勢力の衰退に関与して、物部氏が北武蔵に移住した」と推測する原島氏（埼玉大教授）の見解に合致する現象と想定されたのである。

⑧ 將軍山古墳の築造は、七世紀初頭（あるいは西暦六〇〇年前後）と推定された。將軍山古墳の性格は、出土した銅鏡を中心にしてすでに考察したことがあるが、銅鏡の検討とまた西暦六〇〇年前後の北武蔵の古墳形成の趨勢を考慮すれば、この時期に、將軍山古墳の被葬者が、推古朝の東国支配と密接にかかわった可能性が、推測されたのである。

將軍山古墳（あるいは若王子古墳）をおそらく終末にして、七世紀前半には埼玉古墳群の前方後円墳の造営は衰退する。七世紀中葉前後に、埼玉古墳群の北方に築造された若小玉八幡山古墳は、巨大な石材を使用して、死者の眠る奥津城を壮大に構築しても、前方後円墳という伝統的な墓制は最早採用していなかったのである。

將軍山古墳の築造とほぼ同時期に、埼玉古墳群の北方に、小見真観寺古墳が出現した。この古墳の周辺に築造された虚空藏山古墳、龍山古墳などいくつかの古墳の内容が不明のために、古墳群の性格は定かではなかったが、小見真観寺古墳の出現によって、少なくとも西暦六〇〇年前後に、埼玉古墳群と約四倍隔たった小見の微高地にも、將軍山古墳の被葬者に匹敵する、巨大な権力が成長したと考えることは可能だろう。

原島礼二氏は、北武蔵の古代氏族の系譜を文献資料によって検討されて、七世紀前半に秦氏の勢力が埼玉地域に進出したと想定されている。しかも、「そうした事情を背景として、おそらく七世紀前半に、小見真観寺古墳が全長一一二層という規模を誇りながらつくられた」と推論し、小見真観寺古墳の出現に独自の歴史的解釈を加えられたのである。

小見真観寺古墳が築造された小見地域は、埼玉地域とは忍川の沖積地を距てて隔絶された微高地であった。原島氏は、条里制の復原によって、古代のこの地域を埼玉地域とは別な行政区画と想定されている。おそらく小見真観寺古墳は、埼玉古墳群とは異なった政治社会を基盤にして出現した前方後円墳と推定してさしつかえないだろう。原島氏の推論のように、この古墳が秦氏の進出と関連するかどうか、これはともかくとしても、埼玉地域に比肩する政治勢力が、西暦六〇〇年前後には、この地

また、「関東の石舞台」Ⅱ八幡山古墳について、奥村邦彦氏は、その著書「まぼろし紀行」の中で、次のように書いておられます。

①石室の内部から漆ぬりの棺の破片がみつかった。漆をぬった棺は7世紀以降の天皇や、きわめて高位の貴族など最有力者層の埋葬に用いられたものだ。

②出土例も畿内に限られている。そういう棺の破片が残っていたのだから、この古墳には、よほど高貴な人物か、先進の畿内文化の摂取に熱心な貴族が葬られたのであろう。

たとえば、天智、天武、持統、(669)696年)の三人の天皇のうち、だれかが東国鎮撫に派遣した皇族であろうか、それとも、その皇族にしたがった高位の貴族であろうか。

以上のように、將軍山古墳、小見真観寺古墳、八幡山古墳の三つは、同時代および、それにつづくものでありながら、その関係は、まさに古代のロマンの霧の中にあります。

古代史に関心をおもちのあなたも、ぜひ、この三者の関係について、推理をはたらかせてください。

ヒントになりそうな事がらをならべてみました。そのあとの推理の例に、あなたのお考えに似たものは、あるでしょうか。

★ヒントになりそうな事から

①埼玉古墳群と八幡山古墳、小見真観寺古墳のある若小玉、小見とは、旧忍川により、はっきり区別されているといわれている。

②小見真観寺古墳の副葬品にも、將軍山古墳と同様、仏教の影響が濃いと思われる銅鏡がある。

③それぞれの古墳の石室に使われている石は次のとおり

將軍山古墳：房州石(房総半島産)

緑泥片岩

真観寺古墳：角閃石安山岩(産地不明)

”

八幡山古墳：角閃石安山岩(群馬、二ツ岳産)

”

④行田市の北側は利根川であり、この北方に太田市がある。ここには5世紀中々後半につくられた群馬最大の前方後円墳、太田天神山古墳があり、上毛野君の関係のものといわれている。

#### ★推理の例

①埼玉古墳群は隆勢を誇った毛野国(今の群馬、栃木)に対する大和朝廷勢力のうちこんだ「クサビ」である移住者の墓であって、小見真観寺古墳は、これに対する毛野勢力の最前線となった地元豪族の墓である。

②埼玉古墳群は地元、埼玉の豪族（ただし、大和朝廷にしたらしい）の墓であって、小見真観寺古墳の方が、旧利根川をさかのぼってやってきた大和朝廷勢力の「クサビ」である。

③將軍山古墳も真観寺古墳も、ともに大和朝廷勢力の「クサビ」であって、第一部隊、第二部隊とでもいうような関係である。

④埼玉古墳群は在野の学者、古田武彦氏がいうように、栃木県藤岡町の磯城宮において北関東を治めた加多支酋大王のナンバーツ―が稲荷山古墳に葬られているのであり、関東の大王たちの墓所である。

⑤八幡山古墳は將軍山古墳系の一族が真観寺古墳系の一族をやぶり、元の敵の勢力圏内にたてた記念碑的大古墳である。

⑥八幡山古墳は小見真観寺古墳系の一族が將軍山古墳系を倒し、埼玉古墳群をみはるかす前線にたてたものである。

⑦將軍山古墳系も真観寺古墳系も共倒れとなってしまいその勢力空白圏へ、のりこんできた大和朝廷勢力の貴族の墓が八幡山古墳である。

私達のまち、越谷の古墳時代遺跡、見田方遺跡は出土した鬼高式土師器から、6世紀後葉から7世紀前葉頃に比定されています。ですから、ちょうど、今日、たずねた小見真観寺古墳や、埼玉古墳群のうちの將軍山古墳と同じ時期のものということになります。

見田方に住んだ人達は元荒川の上流にきざかれた大きな古墳のことや、そのすこし前の「乎獲居臣」などときざまれた鉄剣のことなどを知っていたでしょうか。



国鉄熊谷駅で秩父鉄道羽生<sup>は</sup>行の電車に乗りかえる。四つめの駅が武州荒木だ。駅をおりてすぐ、いま電車のきた方向へせまい農道を左折して三、四分歩くと目の前に天州寺の建物がある。この曹洞宗天州寺がひらかれたのはそれほど古いことではない。一六〇七（慶長一二）年開山というから約三七〇年ほど前のことになる。一見なんの変哲もない寺だが、ここには木造の聖徳太子立像（重文）があり、ふだんは御霊殿のなかにおさめられ見ることができないが、住職にたのむと拝観させてくれる。像の高さは一四〇センチほどだが、まるで生ける聖徳太子の感じのするきわめて写実的な像だ。この木像からは戦前解体修理のとき胎内から墨書きの銘が発見された。それによれば、この木像は一二四七（寛元五）年仏師の慶禪<sup>けいぜん</sup>がつくったもので、御年一六歳孝養の像とよばれ、この種のものとしては現存最古のものだ。この像は髪を美豆良<sup>みまら</sup>に結び、両手に香炉を捧げもって父君用明天皇の病氣回復をいのられているさまを木像彫刻にしたもので、宋朝風を加味した鎌倉初期の作風を明白にしている。むずかしい理屈よりも、少しうれいをおびた端正な顔を拝見しながら、こんなりっぱな木像がなぜこんな寺にあるのかも考えたい。親鸞の弟子の源海という僧が荒木にいたとか、荒木の四郎が入手したとかいうが、流入経路はいまのところ、なにもわかってはいない。



# 聖徳太子孝養立像胎内墨書銘考察

この聖徳太子孝養家は現存する太子像の中  
 には、年代的不明な像も三番目に、銅像  
 時代の初期、慶雲元年（二二四七年）の作品  
 である。

像は聖徳太子が一六歳のあり、父用明天皇  
 の病氣平癒を祈っている姿を模したもので、  
 いわゆる孝養像と呼ばれているものひとつ。  
 像が制作された当時の時代は、公感文化が  
 衰退し、新しい政治の担い手として、華々し  
 く台頭してきたのが武家階級、そのひきもと  
 ともあつた鎌倉で、こつした太子像が制作さ  
 れたという事実は、宗教史はもちろぬ美術史  
 上からも大いに注目されることである。

さて、その像の胎内に記されている銘文す  
 なわち祈願文ともいえるのが胎内銘と呼ばれ  
 るものですが、制作年代、作者等を知る上で  
 貴重な資料となるものです。  
 聖徳という僧侶は、「香妻鏡巻四十二」によ  
 ると、この像が作られて一〇年後、すなわち  
 正徳元年（二二五七年）に鎌倉大慈寺の修理  
 作業が開始された時、権律師の位にあつて列  
 したと記されている高僧です。

また願主、西阿弥陀仏とは、鎌倉幕府の関  
 東評定衆を務めていた大江元元（四男毛利四  
 郎季光）の法号です。したがつて「親并舎弟二  
 人」とは、季光の父大江元元、母不詳、そして  
 元親広、時広、宗光の内すべてに致していた二  
 入のことをさしています。

次に願主は、源三位頼政の孫で、頼朝・  
 義経の不祀にまぎこまれ、義経に従つて西番  
 にのたれながら、異域にあり大物兵に上陸  
 して義経と別れて伊賀国黒田庄にひそんで  
 いたところを追手につかまり殺害された悲劇  
 の武将です。また平泰時とは鎌倉幕府三代目  
 執権北条泰時のことです。建久四年（二二八三

年）親阿弥陀仏」と記しましたがこの年の六  
 月に歿しています。すなわち泰時の死後五年  
 後にこの像は制作されたこととなります。ま  
 つてこの銘文には、親兄弟の冥福とともに、  
 泰時の冥福も祈願されています。

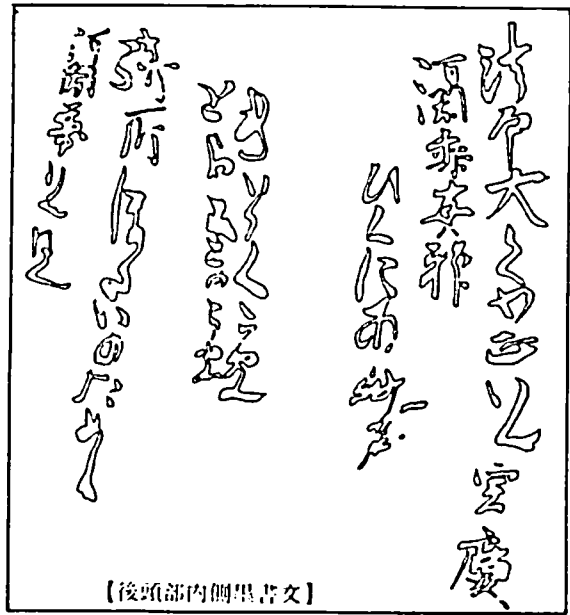
しかし一万、歿してすでに六〇年にもなる  
 源有綱の冥福も並列して祈願されている理由  
 は不明ですが季光との関係で興味をひくこ  
 ろです。

つぎに後醍醐内朝に記された銘文「阿闍梨  
 りんはんが御所菩提の爲に」という文は、阿  
 闍梨りんはんは信長者のひとり、御所とは三  
 代將軍源朝房（二二一九年に暗殺された）の  
 ことをさすと考えられます。実朝が聖徳太子  
 像前に一役かつていたことは「香妻鏡巻十八」  
 などでもあきらかです。

最後に現存の作者、摩訶です。名を法橋摩  
 訶といい、現存する作品はこの天洲寺の像だ  
 けです。その彫りから考えられることは、こ  
 の像が奈良の興福寺北円堂の無著世間に類似  
 している点や、顔の表情が同じ興福寺の梵天  
 像に似ていることなどから当時の代表彫刻家  
 運慶や定慶に何らかの係りのあつた人物とも  
 考えられ、少なくとも地方にのみ活躍した仏  
 師ではなく、中央から下つてきた人か、ある  
 いは中央の道仏法を十分に手中にしていた人  
 といえます。

ちなみに当時鎌倉にあつて活躍していた彫  
 刻家は、雲慶、参河、幸有などです。

ところでこの像の願主、毛利季光は、この  
 像が出来て五ヶ月後の宝治元年（二二四七年）  
 の六月五日、前右衛門平泰村一族の反乱に加  
 担し、とらえられて殺害されました。あそ  
 うくこれを機に、この像も鎌倉を離れることと  
 なり、やがて何らかの縁があつて、現在の荒



【後頭部内側墨書文】

後頭部内側墨書銘

法師大くわ正いん

雲（表）度

阿闍梨真禪

ひくに為妙尼

き□□くこせん

とらことこのせん

御所はたいのために

阿闍梨りんはん

## 聖観音立像

県指定の重要文化財となつている法堂三尺四寸の木造寄木造りの、この聖観音は関東には珍しい藤原時代末の典型的な美しさを持つ立像である。優美さ、温かさ、ふくよかさ、何とも云えない生命感あふれる尊像である。特に腰部がいきしまり、やゝ左に傾く線の美しさはえも云われない均衡の美、貴感の強さに庄せられる。

尊像は現在独尊として、観音堂の中のお厨子の中に安置され、古来秘仏として一般の拝観の機会に恵まれないが、元来は三尊一具の中の脇侍として造立されたものではないかと思われる。ちなみに、南埼玉郡宮代町の西光院に国指定の文化財となつている木造阿彌陀如来、及び函脇侍像の左脇侍となつて観音菩薩立像（三尺四寸五分）とよく似ている、この西光院の尊像には安元二年（一一七六年）の銘記があるところから、真観寺の尊像もこの頃の作と思われる。だから保元、平治の乱の頃であり、法然上人が浄土宗を説き、源頼朝が兵をあげ、平泉の中尊寺が出来た頃である。とにかく、当時、藤原秀河の寄進といわれる遍照院（行田市下忍）の本尊薬師如来像と共に、本像は吾が行田市がほこる藤原仏の一つである。

しかも、昭和三十三年初秋、鎌倉仏師、奇田秀見先生に補修して頂き、完全な姿に近い。たゞ惜しむらくは、天衣と御手は江戸時代の後補となつて居り、甚しくバランスを欠いているのは残念である。

観音さまは七観音、あるいは三十三応化身といつてさまざまの変形がありますが、その変形に対して変化しない本来の形を聖観音さまといつています。

法華経普門品は、観音の功德を説いたものであつて古来この菩薩の信仰は極めて盛んであります。真観寺の聖観音さまはこのような豊満なお顔と、尊麗な内付の御仏体で実に高貴で優麗で、不思議な威厳を感じさせ、仏と私たち迷える者の苦を救済する救済神として、観音信仰の中核になつたこと、思われます。



埼玉県指定 重要文化財

聖 観 音 立 像

法 量 三 尺 四 寸  
木 造 漆 箔 寄 木 造 り

藤 原 時 代 末

天州寺をでて鉄道の踏切と反対の方角へ人家のあいだをぬけてゆくと、二、三分で舗装された県道へでる。この道を行田の方向へ歩く。田圃のなかの一本道を八〇〇メートルほどゆき、利根導水の上にかけられた橋(交差点)をわたる。そこからさらに五〇〇メートルほどゆき、道標のところをはいるとそこが小見の真観寺だ。寺の縁起によれば推古朝につくられたとのことだが、ほんとうは建保年間(一二三世紀)ころの開山らしい。古びた山門をくぐりぬけると正面に観音堂がある。このなかには木像の聖観音像(果・彫)が安置されている。金色にぶく光る優美な立像は、よく藤原時代の面影をいまに伝えている。真観寺で見落としてならないものは裏手の巨大な真観寺古墳(国・史)だ。市天然記念物の赤ケヤキの巨木とともにぜひ見学したいものだ。



虚空蔵山古墳

道路によって後円部が欠失され、前方部（幅25 m、輪郭幅 15 m）のみ残る前方後円墳。

伝虚空蔵山古墳後円部石室天井石

小見真観寺境内にある緑泥片岩の大きなもの。



虚空蔵山古墳 1基

①県・重要遺跡 ②昭44 ③小見字屋敷通1043ほか  
④同上

国指定の小見真観寺古墳を中心とする古墳群中の前方後円墳で、後円部は損壊している。

聖徳太子像、どうして、ここに、天洲寺

約750年ほどむかし、鎌倉でつくられた、この美しい太子像が、いま、どうして、この天洲寺にあるのでしょうか。

そもそも、この像をつくった毛利四郎季光（法号、西阿）は、像の完成5カ月後の宝治元年（1247年）6月5日、妻の兄、三浦泰村の一族の争いから、三浦合戦にまきこまれ、一族、5百余人と共に自殺しています。

### 説①

親鸞門下の関東6老僧の一人といわれた光信、後に源海上人という高僧が行田市荒木の出身で、この地に満福寺を開山、そこに聖徳太子を安置した。

### 説②

荒木の地に文武にすぐれた武士、荒木駿河守隆光（嘉暦3年、1328年生）が慶安元年（1361年）まで居住していた。その年、親鸞上人と出会い、弟子となった。晩年、荒木に帰り満福寺を建立したという。（親鸞は弘長2年、1262年没している）

説③ 行田市史編集委員、大沢俊吉氏

源海上人は浄土真宗高田門徒（栃木県芳賀郡二宮町高田）といわれる専修寺のリーダー・真仏の門下であったのではないか。高田門徒の各寺に太子一特に十六才

孝養像及び絵伝が多い。不運な運命にあった太子像の難をさけて鎌倉から荒木の満福寺にもってきたことは想像に難くない。

その満福寺がいつしか無住となり朽ちはてていたのを3百年後、荒木長善とその遺子が清善寺5世、天洲全堯和尚によって開山したのであろう。

西の石舞台古墳について

1 あじとこ 奈良県明日香村島ノ庄

2 七とは一辺・約50メートルの方墳だった

3 玄室の長さ7・6メートル 幅3・4メートル 高

さ4・8メートル 羨道の長さ11・5メートル 幅

2・4メートル 高さ2・6メートル

4 石はすべて花崗岩 天井石の一つは5トンの重さ

である

5 築造年代は7世紀前半

6 蘇我馬子の墓だとされてい

(古墳の謎 田辺昭三著 祥伝社 61年刊)

兵部使として、各国の部領使（引率者）に命じて防人たちの歌を集めさせ、その中から優れた作品を選んで集録したのである。集まった歌一六六、そのうち採録歌数が八四首で、没歌数は八二であった。採録歌数の内訳は、遠江七、相模三、駿河一〇、上総一三、常陸一〇、下野一一、下総一一、信濃三、上野四、武蔵一二である。武蔵国の特色は、一二首の半数が妻の作品である点である。

防人たちは、出発日まで歌を作って集まることになっていったようである。しかし一般の防人は、歌を創作することや、文字を書くことはできなかった。万葉集二十卷所収防人の歌から分析すると、歌を作った人は徵用された者の約一割ほどしかなかったことでも分かる。それで徵用者は、前に詠まれた作品や他人の作品を少し改作したり、民謡などを手本にしたりして作ったのだろうという。そのため防人の歌には類似の歌が多くあった。<sup>(36)</sup>

素材も同じものが多く、約半数は妻や恋人を詠んだもので、次は父母を思うもの、妻や父母が出征する夫や子を詠んだものなどである。中心的素材は、別離の悲哀の情である。

歌は国府での軍団編成後行われる飲送会宴などで披露したのだろう。それを国府の記録係が書き留め、部領使が難波まで持参して兵部使大伴家持に提出、家持はその中から拙劣歌を除いて万葉集に載せたと推定されている。防人歌の作者名から判断すると、国府での宴には防人の家族も参加したことが分かる。<sup>(23)</sup>

○

八幡山古墳の北六〇〇呎に、地蔵塚古墳がある（県史跡）。七世紀後半の方墳で、一辺約二八呎、高さ四・五呎、幅一呎の周濠を回らし、内部構造は横穴式石室で、奥壁と側壁には人・鳥・馬・武人などの線刻画が描かれていることで有名である。



武蔵国は最初東山道行政圏であったが、防人たちは東山道を通らずに東海道の足柄峠越えで行くことになっていた。神奈川県足柄上郡の地藏堂から静岡県駿東郡竹之下までの道が「足柄のみ坂」で、両県境の高所に足柄峠があり、かつての道は今でもハイキングコースとなって残っている。

難波までの陸路は野宿を重ねながらの歩行が原則であったが、馬を利用してよいことになってきたようである（97頁）。

九州での勤務は十日に一日は休み、苦楽を平均化させるために三か月ごとに勤務地を交代させた。また防人は自給自足の生活であるから、勤務のかたわら田畑を耕作した。

装備は、鍬・斧のみ・鎌が十人ごと、火打具・鋸が五十人ごとそれぞれ支給されたが、弓矢・大刀・草鞋わらじなどは自弁であった。

特殊な場合として、特別に願うと母の同行が許

された。

武蔵国多摩郡鴨里（五日市町落合に推定）から出た防人の火長吉志よし火麻呂は、身のまわりの世話人として母を同行させ、妻が家に残って家事に当たった。同行の母が死亡すると、一年間休暇（帰郷）の喪に服することが許されていた。火麻呂は妻に会いたい一心から、母を殺害して喪に服して帰郷することを思い立った。母を山中に連れ出して殺そうとして刀を振り上げたところ、大地が揺れて裂け、火麻呂は裂け目に入った。母は息子の髪をつかみ、必死になって助けようとしたが、ついに地底に落ち、髪だけがむしり取られて母の手に残った。母はその髪を持ってひとり寂しく帰郷し、仏壇に供えて手厚い供養をしたという（九世紀初、僧景戒著の仏説話集『日本書紀異記』にある話）。

万葉集第二十巻には、八四首の防人歌がある。  
大伴家持おほともりが天平勝宝七年（七五五）の防人交代時

防人とは唐新羅の侵入に備えて好馬を収め、  
が須茶に配置された兵士たちのこと。その

制度の名称でもあった。大化二年(六四二)から  
始まり、延暦十四年(七九五)まで続いた。

防人は、諸の国正丁(二十歳から六十歳までの  
男子)のうちから選ばれて、三年間その任務につ  
いたが、往復に要する日数は、この計算に入れな  
かった。人数は約三〇〇〇人で、一交代は約一〇  
〇〇人位、交代日は二月一日であった。当時の法  
令『軍防令』によると、所定の武器や難波までの旅  
費は自弁で(実際は沿道で食糧の供給を受けたと思わ  
れる)、<sup>(36)</sup> 国司が引率して難波に集結し、それ以後  
は朝廷の役人が引率して舟行で太宰府へ行き、太  
宰府管内の防人司の管轄に入り、防備と訓練に  
当たった。

防人には庸・調・年六十日間の雑徭(強制労働)  
などの課役は免ぜられるけれども、一家にとって  
は有力な働き手を失うと同時に、父母妻子ら肉親  
との永い別れともなった。

天平二年(七三〇)以後は、特に東国兵士が多  
く派遣されるようになった。それは、東国人の勇  
敢さが買われたためといわれているが、ただそれ  
だけではないと考える人もある。大和朝廷は東国  
征服地の支配者層から、勇敢な戦闘員となる若者  
を、防人という名の人名にして出させ、遠地に移  
したのだろうというのである。<sup>(7)</sup>

防人たちは、徴用から出発までは短日時の余裕  
しかなかった(97頁)。逃亡防止のためという。ま  
ず国府(府中)へ集結して軍団を編成する。軍団長  
は国造丁<sup>くにのよつこさばら</sup>といい、それを補佐する副軍団長  
(一人、助丁<sup>すけのよばら</sup>という)、その下に軍団の庶務会計を  
担当する主帳丁<sup>しゅちやうよばら</sup>(一人)がいる。軍団は数班で組  
織し、班長は火長<sup>かみちやう</sup>といい、上丁<sup>かみつよばら</sup>(兵)十人を統括  
する下士官である。丁とは脚のことで、脚力優秀  
な者ということであるから、防人はいかに歩き回  
らなければならなかったかを示している。

埼玉郡上丁

藤原部等母麻呂

足柄のみ坂に立たして袖振らば 家いなる

妹いは 清さやに見もかも (二十卷 四四二三)

足柄のみ坂に立ち、郷里に向かつて袖を振ったら、家にいる妻はよく見て答えてくれるだろうか―見えるはずがないが、見てほしいという願望である。

妻めかけの物部刀自売のつべのとじめ

色よか深く背せなが衣は染めましを み坂給たはらばま清さやかに見む (二十卷 四四二四)

あなたの衣はもつと色濃く染めておけばよかった。そうすれば坂を通る時にはっきり見えるだろうに。

この歌は、夫唱婦随、相愛の夫婦の歌で、防人の歌としてはさわやかな表現である。反面道中を思いやり、別離の悲しさを秘めている。夫婦の姓が違うのは、古代には結婚しても女性は実家の姓を名乗ることになっていたからである。

歌は埼玉郡出身防人夫妻のもので、歌碑は、行

田市藤原町一丁目八幡山古墳横にある。

行田市教育委員会が昭和三十六年、足柄山に向けて立てたもので、高さ一八二坪の根府川石平削り、表面に現代語訳で歌二首を並べて刻んである。揮毫は今津健之助(号健筆)である。

埼玉県は昭和十九年、この一帯の旧地名若小玉は古代の埼玉郷内であり、歌の作者の居住地だったろうと推定して県文化財(旧跡)に指定した。

行田市は八幡山古墳を中心に公園をつくり、町名を作者の藤原部等母麻呂からとって藤原町とした(⑤図)。近くには藤原氏を祀る春日神社の祠があったからという。しかし、藤原氏と藤原部とは違うものであるから、この地に等母麻呂が住んでいたかどうかは分からない。

は藤原部は三毛王を祀る人として有名なり  
夜通如也(そとにうつらうつら)の(藤原部)の  
夜通如也(そとにうつらうつら)の(藤原部)の

## 地藏塚古墳

所在地 行田市蓮原町二の二八

古墳の形 方墳

築造年代 七世紀末

交通の便 高崎線・吹上駅から東武東上線行き  
バスで、終点まで。徒歩十分。

石室の壁に線刻画が描かれている古墳、として知られている。古墳壁画は関東地方では珍しく、もちろん県内ではここだけ。埼玉古墳群から北北東約二・五・の所にあり、かつては十数基を数えた若小玉古墳群の一つだったが、現存するのは次にふれる八幡山古墳と二つだけだ。規模は一边が二十八メートルで、高さは四・五メートル。墳頂に地藏堂を築いていたことから、地藏塚の名がついた。県指定史跡。

石室はすでに、江戸時代から開けられており、地元の人には、大きな切り石を使っているものの、ただの横穴式石室だと、大して気にもとめていなかった。ところが、破壊がひどくなる一方なので、行田市教委が、昭和三十八年、石室を修復しようと、斜めに崩れ落ち

ていた天井石を取り除いたところ、石の陰から線刻画が見つかった。

壁に描かれていたのは、人物八人のほか、馬一頭、シラサギ一羽、舟一隻、家一軒。石室に遊びに入った子供の落書きとみる意見もあるが、いずれも描写が平面的で、遠近法は使われていない。これは原始絵画の特色で、また、崩れ落ちた天井石の陰にあったことを考え合わせると、石室が組み立てられた際に描かれた、とみるのが妥当のようだ。

石室は典型的な明張り型で、奥壁と天井石には緑泥片石の一枚石を使い、そのほかは安山岩の切り石を用いている。石室は普段、カギがかかっており、見学者はまず、管理人の遠藤博さん（〇四八五―五四―五五六三）宅を訪ね、開けてもらうこと。なお、内部は暗いため、大きな懐中電灯をお忘れなく。



壁画の一部投影図

龍泉寺 (所在、行田市若小玉)

龍泉寺は、曹洞宗の寺で医王山龍泉寺と称し、本尊は釈迦牟尼仏であり、永平寺(福井県)、糺持寺(横浜市)を両本山とする。

江戸時代初期の元和七年(1621)柏洲隆昌(はくしゅうりゅうしょう)和尚を開基に、雲祥寺(川里村)八世蘭室吞秀(らんしつどんしゅう)大和尚を開山として開創した。寺域は中世武士若小玉小次郎の館城跡(地名発祥の地)と言ひ伝えられている。

昭和四十年に火災にあい、本堂を消失してしまつたが、壇徒の努力により、再建された。堂内には釈迦三尊(釈迦牟尼仏、文殊菩薩、普賢菩薩)、達磨大師、大権修利菩薩(だいけんしゅうりぼさつ)が安置されている。

山門は江戸時代の創建で、特に屋根瓦は現在の職人では真似のできない造り方で貴重であり、山門の額は、僧で書家でもある大乘愚禪和尚の筆によるものである。

なお山門には薬師堂、宝篋印塔、開びやく塔(板石塔婆)、正和三年(1314)銘の板石塔婆や近世相摸史に名を残した唐糸六郎の墓などがある。

(埼玉県の説明表示板による)

(注 越谷市建長元年板碑は1249、越谷市大成町文和3年六字名号板碑は1354)

唐糸六郎

「万治三年(1660)為花屋源榮禪定門菩提」といふ墓碑あり。

慶安年間(1648-51、江戸初期)の忍藩のおかかえ力士であった。本名は小林六郎といい、唐糸とは、「和糸」に対する「強い糸」をあらわしている。

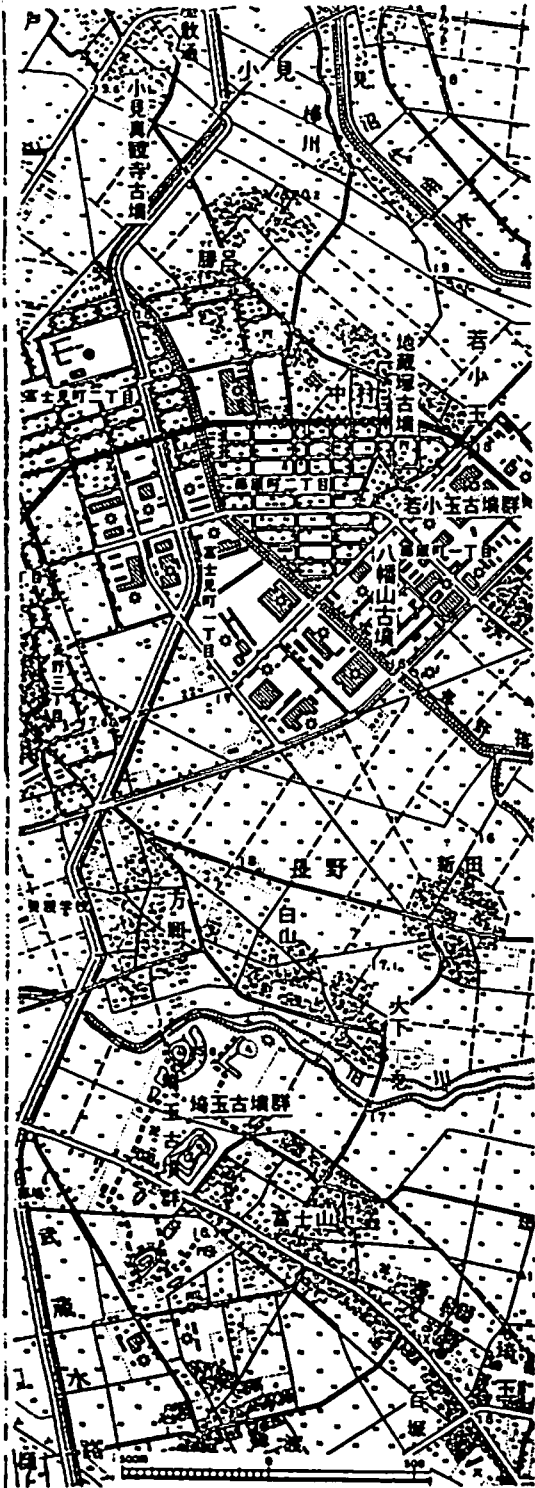
当時、江戸と大坂の間で相摸の東西対抗が行なわれており、江戸の方が連戦連敗していた。

そのとき、忍に力持ちがいるといふので呼びよせられ見事、大坂方の王者「鬼が小島」をやぶって、江戸徳川方の面目をほどこした。

東松山の出身ではあるが、忍藩の奥女中と結婚し、この地でくらしつたという。

附近に「たもと」に入れて鍛練に使つたため、「たもと石」といわれている庚申塔があり、末えいの方も現存されているとのこと。

(龍泉寺のご住職から、おききしたことをまとめた)

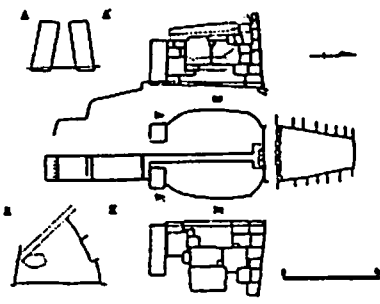
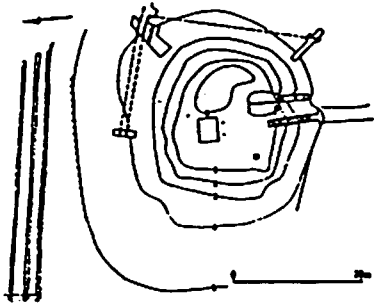


小見真観寺古墳と若小玉古墳群 1:25000



八幡山古墳石室の奥・中室からの出土品 銅腕1、乾漆器、直刀、須恵器長頸蓋、銅漆装方頭把頭、金銅装彌瓦金具、銀製弓弭金物、鉄鏝、八花形金銅製棺座、鉄釘、夾杖状片、塗漆木棺片など。

◀ 地蔵塚古墳(南、石室入口)



# 13 北部埼玉の豪華な終末期古墳

## 小見真観寺古墳と若小玉古墳群

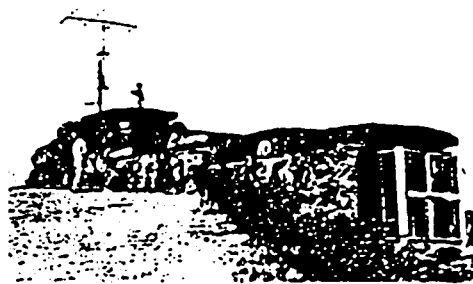
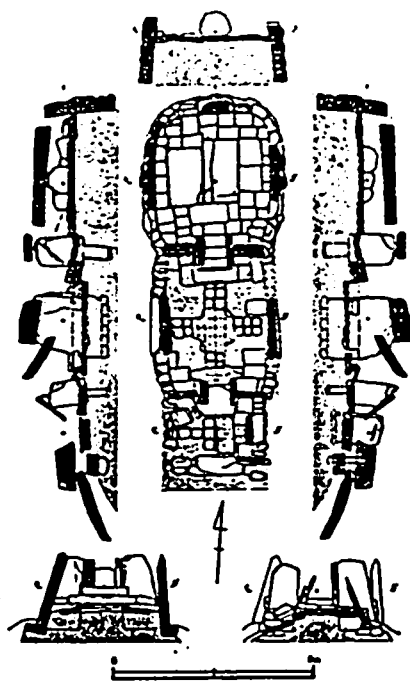
1 前方後円墳、七世紀中ごろ、国指定史跡、2 前方後円墳、2 円墳、方墳、9 基の古墳群、七世紀後半、秩父鉄道東行田駅より1北東約2km、2 東約200m、緑行

小見真観寺古墳の石室（くびれ部寄り）内の副葬品 整列広板、飯留式衝角付罎1、挂甲小札1括、鉄鍔1括、耳環3、頭椎大刀3、圭頭大刀1、刀子1、蓋付有脚銅甕1、銅鏡1など。  
 ▲小見真観寺古墳の墳丘と石室（くびれ部寄り）



埼玉古墳群の北約三・五キロ、会の川西岸の微高地に小見真観寺古墳と呼ばれる前方後円の大墳がある。全長一一メートル、前方部を西北西に向け、前方部と後円部の高さほぼ等しい二子塚形で、横穴式石室が二基、後円部の墳頂下から南面するものと、後円部のくびれ部寄りに北面するものがある。墳頂下ものは碑壁で前室と後室にわかれ、前室が少し長い（長さ約2.4・幅2.1・高さ1.8m）が、ともに緑泥片岩の板石で構築されている。玄室とみられる後室には後世の観音像が祀られており、副葬品はわからない。が、七世紀中ごろの築造であろう。くびれ部寄りの石室は単室（長さ約2.5・奥壁幅1.7・高さ0.9m）で低く、上のような副葬品をもつが、これらは七世紀後半ころのものであろう。

小見真観寺古墳の南東一・五キロほどの微高地には若小玉古墳群と呼ばれる前方後円墳二基、円墳・方墳九基があったが、その南端に八幡山古墳なる大墳がある。径約七五メートルの円墳と推定されている。この横穴式石室は断面六角形の切石で基礎積み（高さ1.7m）した上に床を張り、その上に同様の切石を積み上げ、緑泥片岩の板石や角閃石安山岩・輝石安山岩なども用いて複雑且つきわめて精巧に築き上げている。出土した塗漆木棺は約二・五センチ厚の板の内面に漆で絹布一〇枚を張り重ね、ベニガラを塗り、外面を黒漆膜で覆った豪華なもので、同種の大和の高松塚古墳、マ



八幡山古墳（西より）の石室（復元）

◀八幡山古墳の横穴式石室実測図 八幡山古墳は旧地表より25mの高さまで粘土やロームと黒色土などを交互に積み上げ（版築）た上に、推定全長16.7・奥室幅4.8・高さ3m以上の石室を構築したもの。すでに封土（墳丘）はない。北から奥室（隅丸方形）、中室（胴張り形）、前室（方形）、狭道をつくり、その南には広い前庭を設けている。

ルコ山古墳出土のものには及ばないが、東国では稀にみるもので、その価値はきわめて高い。七世紀後半ころの築造であろう。

また、群中北部の地藏塚古墳の見事な切石には壁画がある。それは周湊をもつ方墳（二辺28・高さ4.5m）の南寄りのところにつくられた横穴式石室（胴張り形、緑泥片岩や安山岩の切石造り）の側壁に画かれた線刻画である。その絵は烏帽子を冠った人、弓をひく人、舟中櫓をもった人など七人の人物、馬一、水鳥一、家らしいものなどで、鉄鍬、須恵器、馬具片などの副葬品からも七世紀後半以降のものであろうか。

このような、小見真観寺古墳なる大型の前方後円墳や、並はずれて堅固にして壮大な石室と、豪華な漆棺や副葬品の数々をもった八幡山古墳は、大化改新前後かその後の新政のなかで、必ずや武蔵国を担った人物たちの墳墓に相違ない。が、これらが埼玉古墳群から少し離れたところにあることは、その被葬者たちは埼玉古墳群の系譜につながるものなのか、あるいは新たな別の勢力なのであろうか。ともあれ、これらの大墳や華麗な品々は、大國武蔵国への発展が、すでに用意されていたことを物語っている。



参考図書

- 郷土の文化財 柳田敏司編著 国土地理協会 57年刊
- 古代東国史の研究 金井塚良一著 埼玉新聞 55年刊
- 埼玉將軍塚古墳の性格をめぐって (「埼玉の考古学」所載) 金井塚良一著 新人物往来社 62年刊
- 辛亥銘鉄剣と埼玉の古墳群(増補版) 読売新聞社浦和支局編および刊 55年刊
- まぼろし紀行 奥村邦彦著 毎日新聞社 55年刊
- 行田、忍城と町まちなちの歴史 大沢俊吉著 聚海書林 58年刊
- さきたま古墳群 埼玉新聞編および刊 61年刊
- 日本の古代遺跡31・埼玉 埼玉地域の項 増田逸朗著 保育社 61年刊
- 見田方遺跡発掘調査報告書 越谷市教育委員会 46年刊
- 武蔵野の万葉を歩く 芳賀善次郎著 さきたま出版会 60年刊
- 埼玉県の歴史散歩 埼玉県高等学校社会教育研究会歴史部会編 山川出版社 59年(改定15版)刊
- 関東に大王あり 古田武彦著 創世紀 54年刊
- 天洲寺 真観寺 各縁起パンフレット
- 東国の古墳 前沢輝政著 そしえて 60年刊